

農薬は使用方法・使用回数をしっかり守って、安全・安心な「なんかん米」を作しましょう！

令和7年度
JA えちご中越
なんかん地区統一版

- 容器等のラベルをよく読み、使用者自身の安全にも十分注意してマスク、帽子等を必ず着用の上、既定量の確実散布を行ってください。
- 住宅等の隣近辺への公害に注意し、飛散や散布時期を考慮するとともに、農作物への薬害防止に努めてください。
- 薬剤残液は、河川、かんがい水路、湖沼、池等に絶対流入しないよう留意してください。(タフブロックも同様)
- 栽培記録カードは、作業した日に記入するように努めてください。

☆薬剤名横の()の数字は県特裁農産物認証における節減対象化学成分数であり、()内の数字をカウントします。網掛けしてある薬剤はこだわり米指定資材です。

令和7年播種用のコシヒカリ BL の種子は休眠がやや深いと推定されるため、発芽揃いをよくするため浸種水温を 12℃、積算温度 120℃をめやすとして浸種を行いましょう。こしいぶきは通常の浸種水温 10～15℃、積算温度 100℃をめやすに行いましょう。

「タフブロック」(0) を使用した種子消毒

農薬登録状況確認日 令和7年2月13日

【適用病害】いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、苗立枯病(トリコデルマ菌・フザリウム菌・リゾプス菌)、褐条病※ ※褐条病は催芽時処理のみ登録有り
○温湯消毒との体系処理により、安定した防除効果が期待できます。

浸種	<ul style="list-style-type: none"> ・雑菌の繁殖を抑えるため、期間中は2、3日に1回水換えを行う。 ・浸種水温は10～15℃に保つ。浸種開始時の10℃以下の低水温は発芽揃いが悪くなる。 <p>催芽前処理 ○蒸気催芽の場合は、催芽前処理をしましょう。 浸種最後の水換え後の水に200倍希釈する ⇒ 十分に攪拌後、種籾を投入してよく揺する ⇒ 24～48時間浸漬する ⇒ 液を攪拌せず、種籾をゆっくり取り出す ⇒ 催芽</p>	使用上の注意点 <ul style="list-style-type: none"> ■ 生菌微生物農薬なので化学農薬を使用した種籾と一緒に水漬けしない。 ■ 反復使用はしない。 ■ 薬液は放置せず、24時間以内に使用する。 ■ 処理は十分な水量で実施する。(籾との容量比1:1以上)。 【処理用の液調整】 例1) 水 20ℓ : タフブロック 100g 例2) 水 100ℓ : タフブロック 500g
催芽	<p>催芽時処理 催芽機内の水温調整をした水に200倍希釈する ⇒ 十分に攪拌後、種籾を投入してよく揺する ⇒ 24時間浸漬する ⇒ 液を攪拌せず、種籾をゆっくり取り出す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・催芽水温は30℃を厳守する。 ・ハトムネ催芽機の場合、循環停止後しばらく静置してから種籾を取り出す。 ・催芽後の籾の乾燥は陰干しとし、過度の乾燥は避け、速やかに播種する。 	
播種	<ul style="list-style-type: none"> ・ベンレート・ダコレート剤、ダコニール剤の使用はできない(菌が死滅するため)。 	
出芽	<ul style="list-style-type: none"> ・無加温出芽の場合、温度条件が気象に左右されやすく障害を受けやすいため、管理に注意する。 ・プール育苗の場合の入水や、他の薬剤の使用は緑化期以降とする。 	

「テクリドCフロアブル」(1) を使用した種子消毒

【適用病害】いもち病、ごま葉枯病、ばか苗病、もみ枯細菌病、褐条病、苗立枯細菌病、苗立枯病(トリコデルマ菌・リゾプス菌)

消毒・風乾	<p>塗沫法 乾燥種籾 1kg あたり原液 5ml を加え、ポットミキサー等を利用して薬液が均一に付着するよう攪拌する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・塩水選などで水洗いした籾は十分乾かしてから行う。 	【200倍液の調整】※種籾 1kgあたり 水 2ℓ : テクリドCフロアブル 10ml
	<p>浸漬法 種籾容量 1.2～1.5 倍量の 200 倍液を作る ⇒ 種籾を投入し 24 時間浸漬する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・消毒効果の安定のため、消毒後は必ず風通しの良い日陰で風乾する。 ・薬液の温度は10℃以下の極端な低温にしない。 	
浸種	<ul style="list-style-type: none"> ・消毒効果を高めるため、前半4日間程は水を入れ換えない。その後は発芽・発根を良くするため、2、3日に1回水換えを行う。 ・浸種は、10～15℃で10日間：積算温度100℃が目安。 	
催芽	<ul style="list-style-type: none"> ・耐性菌の出現を助長する恐れがあるため、ハトムネ催芽機を使用する場合カスミン液剤は加用しないこと。 	

育苗病害対策 ～ 苗立枯病(カビ類)・細菌性病害(褐条病・もみ枯細菌病) ～ ※農薬名の()内の数字は成分数

適用病害	薬剤名	使用量	使用方法	使用時期
苗立枯病(リゾプス菌)	ダコニール粉剤(1)	育苗箱1箱当り 15～20g (使用土壌約5ℓ)	育苗箱土壌に均一に混和する	播種前
	ダコニール 1000(1)	1000～2000倍 1箱当り 1ℓ(使用土壌約5ℓ)	土壌灌注	播種時から緑化期 但し播種14日後まで
苗立枯病(ピシウム菌、フザリウム菌、リゾプス菌)、ムレ苗防止	ナエファイン粉剤(1)	育苗箱1箱当り 6～8g (使用土壌約5ℓ)	育苗箱土壌に均一に混和する	播種前
	ナエファインFL(1)	1000～2000倍 1箱当り 0.5～1ℓ(使用土壌約5ℓ)	土壌灌注	播種時または播種時から緑化期
褐条病、苗立枯細菌病、幼苗腐敗症	カスミン粒剤(0)	育苗箱 覆土 1ℓ当たり 15～20g	覆土に均一に混和する	覆土前
褐条病、苗立枯細菌病、幼苗腐敗症、いもち病(苗いもち)	カスミン液剤(0)	育苗箱 1箱当り 4～8倍希釈液 50ml (使用土壌約5ℓ)	播種した種籾の上から均一に散布する	覆土前

本田防除 ※農薬名の()内の数字は成分数

病害虫の発生状況により、使用農薬、防除時期を変更する場合があります。時期ごとに配布される「売れる米づくり技術情報」をよくご覧下さい。

箱施用剤	対象品種	薬剤名	適用病害虫	使用時期・方法	散布量	使用回数
	コシヒカリ BL	リディアNT(1)	イネトリウムシ、イネミズウムシ、コメイチュウ、ツマグロコバイウカ類、イネコシジロシ、イネコシジロシ類【移植3日前からの使用で適用拡大】	播種時(覆土前)～移植当日	育苗箱の上から均一に散布する	50g/箱 使用土壌約5ℓ
	コシヒカリ BL (いもち病多発発生地区)	GPオリゼリディア箱粒剤(2)	いもち病、もみ枯細菌病、白葉枯病、イネトリウムシ、イネミズウムシ、コメイチュウ、イネコシジロシ、イネコシジロシ類、イネコシジロシ	緑化期～移植当日		
	コシヒカリ BL 以外	エバーゴルフオルテ箱粒剤(3)	いもち病、紋枯病、白葉枯病、イネトリウムシ、イネミズウムシ、ウカ類、ツマグロコバイ	播種時(覆土前)～移植当日		

※エバーゴルフオルテ箱粒剤 → 薬害回避のため、播種後の使用を推奨

本田防除	対象品種	防除体系	薬剤名	適用病害虫	10aあたり散布量	使用時期・方法	使用回数
	全品種	地上防除	スタークル粒剤(1)	カミシ類、ウカ類、ツマグロコバイ、コメイチュウ、イネトリウムシ	3kg	収穫7日前まで	散布
			スタークル液剤 10(1)	カミシ類、ウカ類、ツマグロコバイ	1000倍液 60～150ℓ		
			トップジンM粉剤DL(1)	いもち病	3～4kg		
			トップジンMブル(1)	いもち病、稲こうじ病、墨黒穂病、紋枯病	1000倍液 60～150ℓ		
			バリダシン粉剤DL(0)	紋枯病、疑似紋枯症	3～4kg		
			バリダシン液剤5(0)	紋枯病、もみ枯細菌病、疑似紋枯症	1000倍液 60～150ℓ		

≪無人ヘリで本田防除を行う場合は地域により薬剤が異なります≫